

A close-up photograph of several pink roses in full bloom, with soft, layered petals. The background is a blurred green, suggesting foliage. A vertical black bar is centered over the image, containing white Japanese text.

三 名 古 屋 教 区 と 主 税 町 教 会 の 歴 史

1 カトリック名古屋教区の歴史

東海地方の先駆者

名古屋市東区主税町にある「主税町教会」は、名古屋・岐阜地方に初めてカトリックの教えを広めたテウルパン神父が伝道士・井上秀斎とともに造った、名古屋最古の教会である。この教会は現在、名古屋市都市景観重要建築物にも指定されている。二〇一一年には文化庁登録有形文化財（建造物）にも登録された。洋風の三連アーチに瓦葺屋根の建物である。明治初期に開設された主税町教会の歴史は、カトリック名古屋教区の歴史でもあった。

名古屋地方で最初にキリスト教伝道を行なったのは、ロシア正教の信者である。しかし伝道の成果も長続きはせず、ロシア正教の布教は明治二十年代には衰退した。名古屋、岐阜地方にカトリックの教えを広めた最初の人物は伝道士・井上秀斎である。



1904 年竣工 聖堂入口



1890 年竣工 司祭館

明治中期、教会の基礎が確立されたが、当時はパリ外国宣教会司祭が担当していた。一八八一年（明治十四）フランス人宣教師が来名、二名が受洗している。一八八七年（明治二十）、テウルパン神父が来名すると熱心に伝道活動を支えていた井上秀斎の名義で、主税町の元野呂瀬家の武家屋敷地四百二十坪（登記面積）を購入、仮教会に転用し、そこに啓蒙小学校を開校した。一八九〇年（明治二十三）救老院設立、一九〇四年（明治三十七）八月八日には聖堂建設に着手、十月二十日に竣工した。

一九二二年（大正十一）二月十八日、東京教区の一部だった愛知、岐阜両県と新潟使徒座知牧区の一部だった富山、石川、福井の三県とを会わせ、名古屋使徒座知牧区が新設された。新潟使徒座知牧区長ライネルス神父が名古屋使徒座知牧区臨時管理者として任命され、この知牧区はドイツの神言会に委託された。ライネルス神父は、この教会を知牧区を中心聖堂とし、一九三〇年（昭和五）に知牧区長館（現司祭館）を建設した。設計はマックス・ヒンデル、大工は浦上信徒の岩永伊勢松が請負った。これは和洋折衷とは異なる外人専用の住居として建てられた本格的な洋風建築であり、現在では建築様式や生活様式の資料として、名古屋では数少ない西洋建築



1941年3月6日
松岡教区長着座記念



1930年竣工教区長館（現・司祭館）

となっている。家具はライネルス神父が寄贈した。また一九二七年（昭和二）、主任司祭であったヴィルメス神父は同敷地内に、教会所属の聖母幼稚園を設立した。この幼稚園は名古屋で最も古い幼稚園のひとつであった。

一九二六年（昭和元）、ライネルス神父は新潟知牧区長を辞任し、名古屋知牧区長専任となる。一九四一年（昭和十六）、同神父の名古屋知牧区長辞任の後、松岡孫四郎神父が使徒座任命管理者となった。一九四五年（昭和二十）三月六日、ペトロ松岡孫四郎神父は名古屋兼新潟知牧区長として任命され、その就任式が主税町知牧区長座聖堂において執り行われた。一九四八年（昭和二十三）の秋、松岡知牧区長は名古屋市中消防署附近に千三百坪、武平町に七百坪、東新町七丁目に五百坪を買い、これを提供して名古屋市東区東新町七の一に千三百五十坪の土地を入手、知牧区長館とした。一九五三年（昭和二十八）、新潟使徒座知牧区長に野田時助神父が任命され、松岡神父は名古屋知牧区長専任となる。一九五七年（昭和三十）春、東新町の知牧区長館と昭和区萩原町の聖ヨハネ小神学院の敷地、および鳴海郊外の原野を手離し、東区布池町に二千八百坪の土地を

現在の名古屋教区
司教座聖堂
（布池教会）
名古屋教区（愛知、
岐阜、石川、富山、
福井）の中心聖堂。
献堂 50 周年を記念
して祭壇、説教壇、
司教座を大理石に
更新。



竣工時の名古屋教区司教座聖堂

購入した。一九五九年（昭和三十四）五月、同地に知牧区長館が完成する。一九六〇年（昭和三十五）の三月二十三日には、司祭館が加えられた。一九六二年（昭和三十七）三月二十一日、布池教会大聖堂が竣工して祝聖式が執り行われた。同年四月十六日、名古屋使徒座知牧区は司教区に昇格、松岡神父は初代名古屋教区司教として叙階された。

北陸地方の先駆者

キリシタン迫害後に、カトリックの宣教師がふたたび北陸地方を訪れたのは、一八八〇年（明治十三）のことであった。ドルワール・ド・レゼー神父が、十一月初め、大江伝道士とともに伝道を開始した。北陸地方は、今日でも仏教、特に浄土真宗の教えが浸透した地方であったので、開国してなお日が浅い当時、カトリックの宣教師がこの地方の諸町村で嫌悪され、迫害されたのは当然のことであった。

一八八八年（明治二十）四月、パリ外国宣教会により、それまで岐阜

の講義所で伝道士見習いとして数ヶ月間宿泊していた水田若吉が、金沢の片町に日本天主教教会金沢講義所を創設し、北陸におけるカトリック布教が再開された。金沢での布教は、それまでの巡回布教とは異なり、井上秀斎のような伝道士がその地に滞在して求道者の世話にあたり、宣教師が時折そこを訪問して秘跡をさずけるという形となった。同年八月には、パリ外国宣教会のテュルパン神父がこの講義所を訪れ、金沢市西町公会堂で「道徳哲学の必要を論ず」と題して講演を行い、その後七人の洗礼式が举行された。これが金沢での最初の洗礼であった。翌年五月、講義所は金沢教会となり、クレマン神父が松本から初代主任司祭として着任した。

一八九四年（明治二十七）春に、クレマン神父は富山市鹿島町に一軒家を購入して巡回布教所とし、同じ頃に福井市でも巡回布教所を新設した。そして、それぞれの布教所に伝道士を配置した。当時富山には、二年前の一八九二年六月に函館で受洗し、富山市の正谷家の跡を継いだ正谷（旧姓吉田）亮太郎という信者の医者があり、その積極的な協力もあって布教所は継続され、常時、井上伝道士が滞在していた。富山教会は金沢の巡回教会となった時期もあったが、一九〇一年（明治三十四）四月にカロアン神

父が主任として着任して以来、小規模ながらも活気ある教会活動が続けられた。

一八九六年（明治二十九）八月、金沢教会は金沢市広坂の現在地へ移転した。新しい教会は一五五〇坪の敷地の中に聖堂、信徒控え所、教師館などが点在していた。クレマン神父が一八九八年（明治三十一）春に横浜へ転じた後、ビリング神父がその後任となった。主任司祭が代わると信者の数も減り、その後の進展も思わしくなくなった。

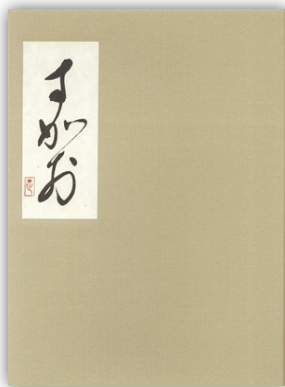
一九〇七年（明治四十）九月に来日した神言修道会（神言会）の宣教師たちは、当初秋田で布教活動をしていたが、北陸三県から撤退するパリ外国宣教会に代わって、布教に乗り出すことに同意し、一九〇九年（明治四十二）春にはフリーゼ神父が秋田から金沢に着任し、秋にはライネルス神父も金沢に来たので、同年十二月パリ外国宣教会は神言会に金沢教会の管理を委譲した。金沢に着任した神言会の神父たちは、精力的に活動を開始した。社会事業指向の強い神言会は、当時まだ医療保健施設の乏しかった金沢に病院設立を企画し、秋田県で布教に従事していた聖霊奉侍布教修道女会（聖霊会）に病院経営を委託した。そのため、金沢市長町上五番丁



現在のカトリック金沢教会

の一画に約二千坪の土地を取得し、三七〇坪の病棟を擁する病院を建設した。こうして一九一四年（大正三）七月七日、内科と外科の二科構成の金沢聖霊病院の開院式が行なわれた。金沢市民から歓迎されたこの病院経営によって、北陸地方におけるカトリック布教には一つの恒久的な拠点が築かれた。これにより神言会宣教師たちは、しばしば仏教勢力の圧力やその他の困難に苦しみながらも、粘り強く地歩を固めることができた。

聖霊病院開院と同年の三月、富山教会主任司祭ヘルマン神父は、町はずれにあった富山教会を市の中央部に移すため、山王町に四百坪の土地を購入して、建築に着手した。同年八月二日にライネルス知牧区長が富山教会の祝別式を執り行い、翌三日には新教会披露式典を挙行了した（青山玄「先駆者の足跡」『素顔の名古屋教区』）。



『素顔の名古屋教区』
カトリック名古屋教区



富山藩家老鈴木邸跡
現在のカトリック富山教会

2 主税町教会の歴史

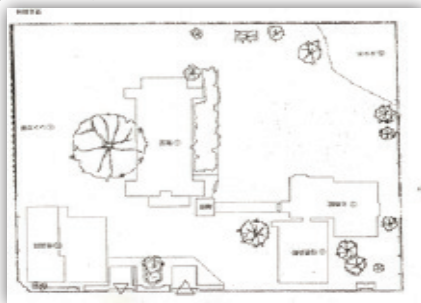
カトリック主税町教会

所在地 名古屋市中区主税町三丁目三十三番地

〈地図6〉

「主税町（ちからまち）」町名の由来

「撞木町の北、白壁町の南にあつて、同町に並行する東西の町である。武家町の中心であつた。野呂瀬主税（主税介カ）という武士が、開町以来住んだため町名となる。その居宅の位置は、善光寺筋と交わる東南角（三丁目）。はじめ主税筋といい、一八七八年（明治十一）主税町となる。野呂瀬家のあとは、聖母幼稚園である。その向かい側成田家（幕末当主成田由三郎）のあとは、ながく日本銀行社宅であり、結城豊太郎なども名古屋支店長としてここに住んだ。一九五五年（昭和三十）以来東海銀行



カトリック主税町教会平面図



主税町教会登録有形文化財標識



カトリック主税町教会



1824年（文政7）城下町復元マップ

主税町クラブとなっている。なお、野呂瀬家は清和源氏、その祖は武田氏に仕え、さらに平岩新吉、成瀬正成に仕える。主税は、通称吉右衛門、初代藩主義直のとき小姓になり、さらに御書院番となり、その後、父のあとをつぎ、成瀬家に仕えた。幕末までこの家は継続、幕末当主は勘之助であった」(江崎公朗『山吹の歩み』)。

野呂瀬家は尾張藩士名寄・士林沂洄によると、野呂瀬主税介である。主税町筋善光寺筋南東南に住んでおり、一八二四年(文政七)藩士録にその名が見られ明治期まで同所に屋敷を構えていた。禄高四百石、役職は大御番組であった。明治の子孫は勘之介という。

主税町教会の建物

一八八七年(明治二十)夏頃テュルパン神父が来名し、武家屋敷地四百二十坪余を井上秀斎の名義で購入、仮教会に転用、そこに啓蒙小学校を開校。一八九〇年(明治二十三)救老院設立、司祭館を建設。一九〇四年(明治三十七)八月八日には聖堂建設に着手、一〇月二十日に竣工し、



司祭館



正面門柱に掲げられた標識

同二十三日マレシャル司教代理により祝別された。教会の敷地東南隅にフェラン神父により富士山の火山岩を用いてルルド洞穴が建設されたのは一九〇九年（明治四十二）であつた。なお鐘楼の鐘は一八九〇年にフランス・マルセイユで造られたものである。

創建された聖堂は、平屋建切妻造棧瓦葺、側面は下見板張りとなっており、妻入りの長屋風で鬼瓦の位置に十字架が建つていた。建物は啓蒙小学校や屋敷の古材を再利用しており、一九二二年（大正十一）、知牧区長聖堂に昇格した時、正面を改築し白漆喰を塗った妻壁を立ち上げ、三連アーチの柱廊玄関に替えられた。信者会館（旧司祭館）と鐘楼は、一八九〇年（明治二十三）頃建てられたが、一九八〇年（昭和五十五）、国道四一号線の拡幅工事の時、切妻屋根の一部を撤去した。

主税町教会聖堂は伊勢湾台風以後老朽化のため、一九八五年（昭和六十）改築（屋根小屋組・床・外壁及び正面妻壁）しているが、内部平面・天井・細部意匠に著しい変更はない。オルガンや祭壇は創建当時のもの。床は創建時から畳敷きであつたが、二〇〇三年（平成十五）フローリングに張り替えられた。一九九〇年（平成二）に撤去されていた鐘楼を現在の



明治のレンガ塀



信者会館

位置に移設復元した。なお、テュルパン神父が野呂瀬家屋敷を購入した当時、教会施設とともに造られた赤レンガ塀は北側の主税町筋に長さ三十メートルほど現存している貴重な文化財で、名古屋市指定保存樹ケヤキの大木とともに一九九二年(平成四)「名古屋市都市景観重要建物等指定物件」に指定されその景観は市民に親しまれている。

二〇一一年(平成二十三)三月十八日、文化庁登録有形文化財(建造物)に登録申請され、七月二十五日付けで「信者会館」・「司祭館」・「煉瓦塀」が登録された。

井上秀斎と歴代名古屋教区長

ここではキリスト教開教以後の名古屋教区の歴史を、現在の名古屋教区の礎を築いた井上秀斎と、歴代名古屋教区長の略歴を通して紹介する。

伝道士・井上秀斎(一八五四～一九四二年)

井上秀齋は、一八五四年（嘉永七）岐阜県本巣郡席田（むしろだ）村字春近（現、本巣市春近）に、蘭方医井上齡碩（れいせき）の長男として生れた。齡碩は席田郡春近村の自宅で一八五四年（嘉永七）から一八七二年（明治五）まで寺子屋（門弟数二十名）を開設していた（糸貫町史）。

井上秀齋は一八七五年（明治八）、英語を学ぶため上京し、フランス人宣教師経営のマリン学校に入學した。同年八月、ドルワール・ド・レゼー神父から受洗し、カトリック司祭を志し神學生になった。一八七八年（明治十一）七月、夏休みに岐阜市の自宅に帰省する途中、名古屋市本町二丁目にあった銭屋という旅館に一泊した。そのとき、番頭から、数年前広小路の獄屋や西本願寺別院の女人講堂内に収容されていた浦上キリシタンの生活などについて聞き知ることになった。一八八二年（明治十五）には侍祭の位になった。そのまま進めば東京教区初の日本人司祭となるはずであった。しかし副助祭叙階前の調査の結果、秀齋は井上家の長男であり、家を相続する人が他にいないことが判明し、司祭に成ることが許されず東京を去った。

その後、故郷春近に戻り、父の家業を手伝うかたわら、週に一回五つの

明治の伝道士
井上秀齋



『岐阜県天主教伝道日記』
井上秀齋直筆

講義所を巡回し宣教活動を行った。一八八七年（明治二十）、秋田教会から赴任したテュルパン神父と共に、名古屋、岐阜、土岐、大垣、高須の講義所を巡回する。名古屋の主税町に「約千坪の土族屋敷」を秀斎名義で購入し、武家屋敷を教会に改造、主税町教会に移り住んだテュルパン神父は、しばらくして、岐阜教会以外のすべての講義所を閉鎖し、「啓蒙小学校」など主税町教会での事業の確立をはかった。しかし、伝道士秀斎は、信者の便宜を考慮して、それに強く反対した。岐阜教会が廃止されると、秀斎は伝道士の職を完全に辞し、父より受け継いだ医業に専心した。

一八八七年（明治二十）以来岐阜県本巣郡席田村会議員、翌年から席田村避病舎主治医となった。一八八九年（明治二十二）には、本巣郡医師会副議長に当選し、医師として種々の重要な地位を歴任した。

秀斎について青山玄神父は次のように述べている。「その後のカトリック教会の伝道方針の変更や日本社会の変化により、このような開拓伝道は抑圧されたが、秀斎はその苦しみに堪えて、昭和十七年の帰天まで教会に忠実に留まった。」（青山玄「キリシタン時代と明治前期における美濃尾張伝道の性格」）。



北方町役場附近地図



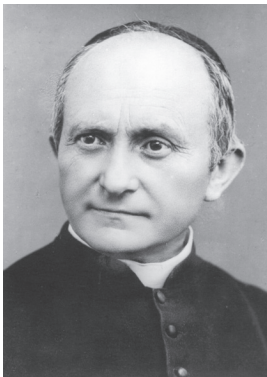
西洋建築の医院と自宅

1970 年解体か、現在は共同住宅敷地

初代教区長(知牧) ヨゼフ・ライネルス(一八七四〜一九四五年)

一八七四年(明治七) 三月二十日にドイツのメンヘングラトバハ市に近いノイヴェルク村に生まれ、二十四歳で司祭叙階を受けた。この後一九〇七年(明治四十)にドイツのボン大学において哲学博士の学位を得る。このわずか二ヶ月後にアーノルド・ヤンセンが設立したカトリック神言修道会(神言会)に入会した。

一九〇九年(明治四十二) 来日し金沢市で日本語を習得後、宣教活動に従事した。一九二二年(大正二)九月には第四高等学校(現在の金沢大学)でドイツ語を教える。同年八月十三日新設された新潟使徒座知牧区の初代知牧区長として就任。ライネルス神父が北陸地方を宣教のため巡視した際、この地方の医療事情が乏しいことを知り、アメリカ、ヨーロッパなどを遍歴し寄付を募り、一九一四年(大正三年)に現在の金沢聖霊総合病院を創設し、聖霊奉侍布教修道女会に経営を委ねた。一九二〇年(大正九)秋田で聖心愛子会(現在の聖心の布教姉妹会)を創立したものの手続き上の不備があり一旦解散し、一九二六(大正十五) 教皇庁の認可を得て再建した。



アーノルド・ヤンセン



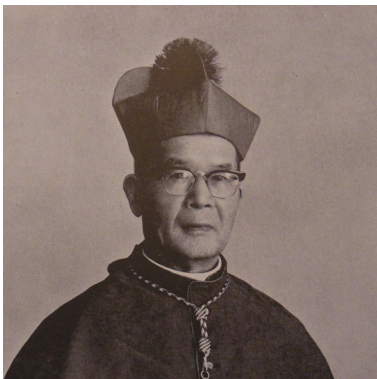
ヨゼフ・ライネルス

この間、一九三二年（大正十一）二月十八日新設された名古屋使徒座知牧区の使徒座任命管理者を兼任した。一九二六年（大正十五）、新潟使徒座知牧区長を退任し、名古屋教区長（知牧）に専任した。活動の本拠地を名古屋地区に移したライネルス神父は、教育事業に献身し、一九三二年（昭和七）、名古屋市昭和区五軒家町に学校法人南山中学校、一九三六年（昭和十一）、南山小学校（今の市立八事小学校）を創立した。

一九四一年（昭和十六）ライネルス神父は名古屋使徒座知牧区長を退任した。

第二代教区長 ペトロ松岡孫四郎（一八八七年～一九八〇年）

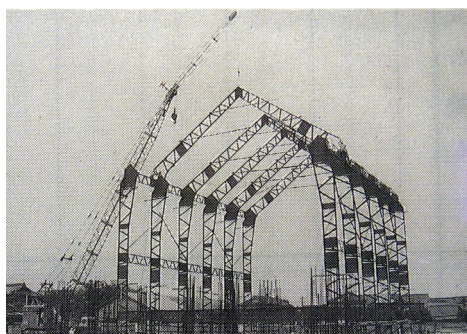
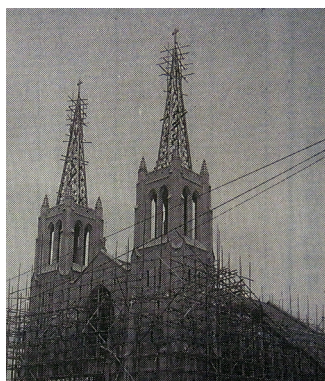
一八八七年（明治二十）三月二十日、長崎市三原町の旧信者の家庭に生まれた。一八六七年（慶応三）七月から翌、明治一年の迫害に祖父母、両親（咲太郎とデン）、乳飲み子の源三郎も他の浦上信徒と共に流罪にされている。四男である彼は、迫害のため島根県津和野の「三尺牢」で死去した祖父の名を取って孫四郎と付けられた。一九〇一年（明治三十四）、当時長崎市大浦にあった公教神学校に入り、一九一八年（大正七）二月二十日、



ペトロ松岡孫四郎

コンバス長崎司教によつて司祭に叙階された。同年三月、長崎港外伊王島の馬込教会主任となった。一九三八年（昭和十三）、五十歳の時、出生地である浦上教会の主任に迎えられた。三年後の一九四一年（昭和十六）三月、ライネルス神父の名古屋知牧区長退任に伴い、名古屋知牧区及び新潟知牧区の使徒座任命管理者に就任。一九四五年（昭和二十）からは二つの使徒座知牧区長を兼任した。一九五三年（昭和二十八）新潟知牧区長を辞任し、名古屋知牧区長となった。一九六二年（昭和三七）名古屋の中心部に鉄筋コンクリート・ゴシック様式の大聖堂（現在の名古屋司教座聖堂・布池教会）と教区長館並びに小神学校（現在の名古屋教区センター）を新築した。同年四月十六日名古屋知牧区が司教区に昇格されたのに伴い、初代名古屋司教として叙階された。第二ヴァチカン公会議にも第二会期から出席した。また教区長として、教区における宣教司牧の充実を図るために聖心布教会、スカボロ外国宣教会、幼き聖マリア修道会（聖カピタニオ高校）、聖マリアの無原罪教育宣教修道会（岐阜・聖マリア女学院）などを教区に招請した。

一九六九年（昭和四十四）松岡孫四郎司教は名古屋教区長を退任した。



布地教会大聖堂建設工事の様子

第三代名古屋教区長 アロイジオ相馬信夫（一九一六年～一九九七年）

一九一六年（大正五）六月二十一日、相馬又二郎と鈴子の三男として東京で生まれた。一九二二年（大正十）東京教区神田教会で受洗した。浦和高等学校、東京帝国大学理学部天文学科、同大学院に学ぶ。一九四二年（昭和十七）応召し、パプア・ニューギニアのラバウルに出征した。一九五三年（昭和二十八）東京カトリック神学院入学。一九六〇年（昭和三十五）東京教区司祭として叙階された。松岡孫四郎司教の教区長退任に伴い、一九六九年（昭和四十四）九月十五日、名古屋司教として叙階された。教区長としての任務のかたわら、教区内の社会福祉事業や日雇い労働者炊き出し支援活動を強力に推進した。対外的にはカトリック正義と平和担当司教・会長として、韓国の詩人金芝河氏に対する死刑阻止活動を展開。また、一九八九年（平成元）八月国連非植民地化特別委員会で東チモール独立を訴えた。一九九一年（平成三）湾岸戦争の際には自衛隊機の派遣に反対し、民間機をチャーター、避難民を移送した。

一九九三年（平成五）相馬信夫司教は名古屋教区長を退任した。



アロイジオ相馬信夫

第四代名古屋教区長 アウグスチノ野村純一（一九三七年～）

一九三七年（昭和十二）十一月二十日、野村家の長男として高知市で生まれた。一九四九年八月二五日（昭和二十四）主税町教会で受洗。一九五六年（昭和三十）東京カトリック神学院、上智大学文学部哲学科入学。一九六二年（昭和三七）三月上智大学文学部哲学科修士課程修了。同年ローマ・プロパガンダ神学院入学。一九六四年（昭和三九）十二月十九日ローマ・プロパガンダ神学院聖堂で司祭叙階。一九六七年六月教皇庁立ローマ・ウルバノ大学神学部博士課程修了。神学博士の学位を取得する。同年九月日本に帰国し、カトリック主税町教会助任司祭となる。相馬信夫司教の教区長退任に伴い、一九九三年（平成五）七月四日名古屋教区司教として叙階された。教区長としての任務のかたわら、教区内の社会福祉法人理事長、学校法人理事、さらに公益財団法人世界宗教者平和会議日本委員会評議員などを兼職している。



教皇ベネディクト 16 世とアウグスチノ野村純一

